

研究業績書

2022年 7 月 29 日

氏名 佐々木 聡

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) なし				
(学術論文) 1 児童の学習意欲の形成に関する学校心理学的研究—学習規律と学級適応感との関連について— (査読あり)	共著	2014年3月	教育実践学論集 (兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科), 15, 27-38.	本研究の目的は, 小学生の「学習における相互作用」「授業場面における被受容感」「学級適応感」「学習規律」と「学習意欲」の関係について検討することであった。分析には重回帰分析を用いた。学習意欲との関係が特にみられたのは, 学習規律のうち「授業への強迫的態度 (きまじめさ)」や, 学校適応感のうち「教師との関係」であった。この結果について, 学校心理学や教育心理学の視点から考察がなされた。 担当部分: 共同研究につき本人担当部分抽出不可能であるが, 特に分析と考察の部分を担当した。 [著者名] 真田穰人, 浅川潔司, 佐々木聡, 貴村亮太
2 高校生の自己愛と居場所の選択や居心地との関連	共著	2015年2月	兵庫教育大学研究紀要, 46, 31-37.	本研究の目的は, 高校生の自己愛傾向と居場所との関係について検討することであった。「他の人と一緒に過ごせる空間」での居心地得点は, 自己愛高群が高かった。「周囲に人がいても一人で過ごせる空間」での居心地得点は, 「優越感・有能性」高群が高かった。「周囲に人がいない自分だけの空間」での居心地得点は, 「注目・賞賛欲求」と「自己主張性」の高群が高かった。この結果について, 学校心理学の視点から考察がなされた。 担当部分: 共同研究につき本人担当部分抽出不可能であるが, 特に考察の部分を担当した。 [著者名] 浅川潔司・檜皮万里子・南雅則・佐々木聡・真田穰人
3 中学生の自己愛傾向と学校適応感との関連 (査読あり)	共著	2015年3月	教育実践学論集 (兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科), 16, 1-9.	本研究の目的は, 中学生の自己愛傾向と学校適応感との関係について検討することであった。「自己愛総合」と「注目—主張」の主成分得点や性別と, 学校適応感の得点との関係を分散分析で検討した。自己愛総合の高群は学校適応感も高かった。「注目・賞賛欲求優位群」は「情緒的安定性」と「家族との関係」が低く, また, 同じ群の女子は「友人の関係」が低かった。これらの結果について学校心理学の観点から考察がなされた。 担当部分: 共同研究につき本人担当部分抽出不可能であるが, 研究計画の立案, データの収集, 分析と考察に至るまで, 全体を通じて主導的役割を果たした。 [著者名] 佐々木聡・浅川潔司・真田穰人・南雅則

4 構成的グループ・エンカウンターを活用した中学校新生オリエンテーションの実践研究—期待と予期不安, 入学後の学校適応感に注目して— (査読あり)	単著	2019年3月	人間教育学研究 (日本人間教育学会), 6, 163-170.	本研究の目的は, 中学校新生の対人関係における適応を促進するための構成的グループ・エンカウターのプログラム内容とその効果を検討することであった。実施後には「期待」が高くなり, 「予期不安」は低くなった。また, プログラム前後での期待と予期不安の変化は, 入学後の「教師との関係」と関連がある可能性が示唆された。これらのことを踏まえて, 実践全体について学校心理学の視点から考察がなされた。
5 質問紙アセスメントを活用した教師の協働に関する実践研究—学校適応感尺度と社会的被害認知尺度を用いて— (査読あり)	単著	2021年3月	人間教育学研究 (日本人間教育学会), 7, 79-85.	本研究の目的は, 質問紙アセスメントを活用した教師の協働のあり方について検討することを主たる目的とした。具体的には, 教育相談コーディネーターの役割を果たす教員が, 学年会議において質問紙の活用について介入することが, 教師の協働にどのような影響をもたらすかということについて検討した。その結果, 共通の資料を活用することや学校心理学の知識を提供することで会議において相互コンサルテーションが成立する様子が観察された。そして, その結果について学校心理学の視点から考察がなされた。
6 いじめの発見に活用できる社会的被害認知尺度の開発 (査読あり)	単著	2022年3月	人間教育学研究 (日本人間教育学会), 8, 57-65.	本研究の目的は, いじめを発見するために役立つ質問紙を開発することであった。先行研究や, 教員とスクールカウンセラーを対象とした予備調査の結果をもとに, 社会的被害を受けた生徒の主観を測定できる項目を収集した。探索的因子分析の結果, 「被害認知」と「不調感」の2因子が抽出された。また, いじめの被害を訴える生徒は被害認知と不調感が一般の生徒よりも高かった。さらに, 社会的被害認知と学校適応との関係を調べたところ, 被害認知・不調感とも, 友人関係や情緒的安定性と有意な相関がみられた。これらの分析の結果から, 社会的被害認知尺度はいじめの発見に活用できる, 一定の信頼性・妥当性をそなえた尺度であると判断された。
7 大学入学前教育としての探究学習講座の試み—高大接続, 新学習指導要領ならびにICT活用を意識して—	単著	2022年3月	高野山大学論叢, 57, 107-122.	本研究の目的は, 高等学校において, 大学入学前教育としての探究学習講座を実施し, その内容と効果について検討することであった。あわせて, 新学習指導要領において総合的な探究の時間を運営していく上での課題について検討することも目的とした。高校3年生に, 探究の進め方についての講義と演習を実施し, 各自で探究活動に取り組ませた。その内容について, ICTを活用したオンラインでの口頭発表と, 対面でのポスター発表を行わせた上で, 最終レポートを提出させた。受講生への調査の結果, この講座はアカデミック・スキルの習得に一定の効果があったと判断された。一方, 課題の設定方法や指導方法, 教員研修の方法についてさらに検討する必要があると考えられた。

<p>8 学校におけるICTの活用と課題についてー国語教育及び生徒指導・教育相談を対象としてー</p>	<p>共著</p>	<p>2022年3月</p>	<p>高野山大学論叢, 57, 93-106.</p>	<p>本研究の目的は、学校におけるICTの活用とその課題について、国語教育と生徒指導、教育相談を対象として考察することであった。それぞれの研究者の立場から、ICT活用の有効性と課題について議論がなされた。今後のICT機器の普及に伴い、ICT教育が推進していく中で、さらに検討が必要であると考えられた。 担当部分：生徒指導に関する内容について担当した。 [著者名] 溝端悠朗・佐々木聡・上野和久・鈴木晴久</p>
<p>9 構成的グループ・エンカウンター (SGE) 体験の効果測定を試みー特性不安水準による活性化と安定度からの検討ー</p>	<p>共著</p>	<p>2022年3月</p>	<p>びわこ学院大学・びわこ学院大学短期大学部研究紀要, 13, 35-42.</p>	<p>本研究の目的は、構成的グループ・エンカウンター (SGE) 体験が大学生の心理状態に及ぼす影響とSGE体験の受け止め方について探索的・実証的に検討し、SGE体験の効果について知見を得ることであった。SGE体験は特性不安の高い学生の活性化と安定度を高める効果が見られたが、その効果は介入期の一時的なものであったことが示唆された。また、ジェネリックSGEのエクササイズの実施においては参加者の関係性の考慮という点が今後の課題となった。 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能であるが、主に調査項目の検討および結果および考察の検討を担当した。 [著者名] 南雅則・佐々木聡・真田穰人</p>
<p>(主な学会発表)</p> <p>1 いじめの発見に活用できる社会的被害認知尺度の作成</p>	<p>共著</p>	<p>2014年11月</p>	<p>日本青年心理学会 第22回大会 pp. 42-43 愛知県：名古屋大学</p>	<p>本研究の目的は、いじめの認知を測定する尺度を開発することと、測定されたいじめの認知と学校適応感との関連を検討することであった。開発された「社会的被害認知尺度」は「被害認知」と「不調感」の2因子から構成された。また、社会的被害を認知した者は、学校適応感の「情緒的安定性」、「友人との関係」、「家族との関係」が低下していることが明らかになった。この結果について学校心理学の視点から考察がなされた。 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能であるが、研究計画の立案、データの収集、分析と考察に至るまで、全体を通じて主導的役割を果たした。 [著者名] 佐々木聡・浅川潔司</p>
<p>2 中高一貫校での高校移行期における学校適応感に関する研究ー自己愛傾向との関連に注目してー</p>	<p>単著</p>	<p>2016年10月</p>	<p>日本学校心理学会 第18回名古屋大会 pp. 100 愛知県：名古屋大学</p>	<p>本研究の目的は、中高一貫校における高校進学前後の学校適応感の変化について検討することと、その適応感と個人の特性としての自己愛傾向との関連についても検討することであった。学校適応感は、進学期に上昇しており、その水準は進学後の11月になっても維持されていた。また、自己愛水準の高い生徒は「進路意識」「友人との関係」「部活動への意欲」の適応感が高かった。この結果について学校心理学の視点から考察がなされた。</p>

3 中高一貫私立中学・高校における保護者ピアサポートの実践	共著	2017年8月	第15回日本教育カウンセリング学会研究発表大会（兵庫大会） pp. 144-145. 兵庫県：大手前大学	<p>本研究の目的は、中高一貫校で保護者対象ピアサポートの会を实践し、その内容について検討することであった。会は話題提供と保護者どうしの話から構成された。参加者の2次元気分尺度への回答は肯定的なものであった。自由記述では、参加してよかったこととして「保護者どうしのつながり」「悩みの解決」「自分自身を見つめなおすこと」などが挙げられた。この結果について、学校心理学や臨床心理学の視点から考察がなされた。</p> <p>担当部分：実践は共同で行ったが、研究計画の立案、データの収集、分析と考察をほぼ単独でおこなった。</p> <p>[著者名] 佐々木聡・浅井宣光・日永田美奈子・梅野智美</p>
4 新型コロナウイルス感染症流行下における進路選択の満足度に関する研究—レジリエンスとソーシャルサポートに注目して—	共著	2021年8月	日本教育心理学会第63回総会 pp. 440 オンライン	<p>本研究の目的は、COVID-19流行という危機的な状況下における高校生の進路選択の満足度に対して、どのような要因が肯定的な影響を与えたのかを探索的に検討することであった。教師や家族のサポートと進路選択の満足度に関連がみられ、獲得的レジリエンスが教師サポートや友人サポートと関連していることも示唆された。特に、資質的レジリエンスが低い生徒においては、獲得的レジリエンスの高い場合に、教師からのサポートを強く知覚していた可能性が示された。このけっかについて、学校心理学の視点から考察がなされた。</p> <p>担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能であるが、研究計画の立案、データの収集、分析と考察に至るまで、全体を通じて主導的役割を果たした。</p> <p>[著者名] 佐々木聡・南雅則・真田穰人</p>
5 大学入学前教育としての探究学習講座の試み	単著	2022年1月	第7回日本人間教育学会大会、pp. 24-25. オンライン	<p>本研究の目的は、高等学校において、大学入学前教育としての探究学習講座を实施し、その内容と効果について検討することであった。高校3年生に、探究の進め方についての講義と演習を实施し、各自で探究活動に取り組みさせた。その内容について、ICTを活用したオンラインでの口頭発表と、対面でのポスター発表を行わせた上で、最終レポートを提出させた。受講生への調査の結果、この講座はアカデミック・スキルの習得に一定の効果があつたと判断された。一方、課題の設定方法や指導方法、教員研修の方法についてさらに検討する必要があると考えられた。</p>
(その他) 1 進路指導におけるストレスマネジメント教育の試み	単著	2021年6月	一般社団法人日本スクールカウンセリング推進協議会会報、16、5-6.	<p>本研究の目的は、高等学校の進路指導において、ストレスマネジメント教育を实施し、その効果について検討することであった。ガイダンスカウンセラー資格を有する進路指導部長が、ストレスに関する講義と、リラクゼーション法として呼吸法・動作法・漸進性弛緩法の実習を实施した。二次元気分尺度を用いてリラクゼーション前後の気分を測定したところ安定度に肯定的な変化がみられた。また、生徒の振り返りにおいてもリラクゼーション法を实践したという記述がみられた。一方、受講生徒へのフォローアップや長期的な効果の検証については課題が残った。</p>